

抗日軍政大学について

北 山 康 夫

一

一九三一年の滿洲侵略によって中國の受けた打撃は甚大なものであった。中國はこれによって領土の一一・五%、人口の八%、鐵鑛・大豆の七〇%、鐵道の四〇%を失い、唯一の出超區域、そして多くの民族産業を奪われた。中國にとって滿洲こそは最も將來性に富む農業・工業の中心地であった。日本の滿洲侵略は長い間その機會をねらっていた計畫的なものであっただけに、抗日運動は一段と高まった。

先ず抗日の火の手をあげたのは、時代の動きに敏感な學生であった。九月二十日には早くも上海・北平・天津・杭州・太原などで大規模なデモが行われ、全國の學生は請願團・示威團をつくって南京におしかけた。彼らは一兵の援助も行わず、張學良に日本の侵略に抵抗しないよう嚴命し、共產軍の討伐に全力をあげ、ひたすら國際連盟に依存しようとする南京政府を糾弾した。

労働者の活動もめざましかった。上海の労働者は十月二日全體代表者會議をひらき、(一)南京政府にたいして即時出兵抗日を求めること、(二)全國の労働者に日本との經濟斷交を求めること、(三)全國の労働者は義勇軍を組織し、政府に武器を要求すること、(四)抗日會に命じて、嚴重に奸商(日本人と取引する商人)の取締りをさせること、などを決議し、上海の日本人工場に働いていた八萬餘人の労働者は一齊に退職した。

満洲の戦火が上海に飛火して一・二八事變がおこると、上海總工會のよびかけに應じて、交通・水力・電氣を除いて、勞働者はストライキに入り、多くの勞働者は大刀隊・手槍隊・長槍隊・工程隊・交通隊などを組織し、十九路軍と一體となつて作戦に参加し、市民戦の様相を帯びてきた。學生もまた戦闘に参加した。各學校の義勇隊が活躍したが、最も著名なのは復旦大學と馮庸大學の義勇軍で、かれらは十九路軍と一緒にたつたか、復旦大學だけでも二百餘人の死傷者を出している。その他、さんごうを掘ったり、負傷兵を救護したり、募金を行つたりして、青年學生の活動はめざましかった。日本の海軍陸戦隊司令官の鹽澤は、四時間で上海を占領できると宣言し、本庄繁は三ヶ月で全中國を支配できると豪語したけれども、十九路軍を中心とする上海市民の抵抗の強さは外國人を驚嘆させ、中國軍を再認識させた。^⑥ エドガー・スノウは日本軍は集團として戦うと強いが、一人では戦争ができない、しかし中國軍は一人でも充分に戦えると賞賛しているが、それはファッシストの軍隊と、國土防衛にたち上つた義勇軍とのちがひであつた。辛亥革命の闘士、章炳麟はずでに書齋の人となつていたが、情熱をもつて十九路軍の奮戦をたたえ、魯迅もまた名もなき庶民の愛國心に感動した。

こうして満洲事變後の中國の抗日運動は、菊池貴晴氏も指摘されるように經濟ボイコットが更に發展して經濟斷交となり、國交斷絶宣言布告（上海市民大會・上海各大學抗日救國會）日本軍の驅逐（上海市商會）徵兵制度の即時施行（抗日救國市民大會）抗日義勇軍の組織（上海紗廠工人救國團）軍事教練の實施・強化（上海教育界救同連合會）などの決議に見られるように政治的軍事的色彩が強くなつてゐる。^⑦ 五四運動いらいさかんになつてきた抗日運動は、日本の露骨な武力侵略が開始されるとともに、軍事的な性格をおびざるをえなかつた。平和的な中國人民も「齒には齒を」の政策をとらざるをえないところに追いつめられた。

一九三三年になると日本はさらに熱河を侵略し、長城をこえて北京・天津千キロのところを迫つた。五月には塘沽協定を締結して、華北の一角に非武裝地帯を設定し、三四年には天羽聲明を出して、全中國を支配せんとする野心を表明し

た。三五年には梅津・何應欽協定、土肥原・秦德純協定を結んで、河北省・チャハル省から國民黨・中央軍を撤退させ、やがて冀東防共自治政府も成立した。一九三五年シナ駐屯司令官として赴任した多田駿少將は、

北支ニオケル支那民衆ノ救済ト福祉増進トヲ根本主張トスル我軍ノ公明正大ナル方針ハ終始一貫セルモノデアリ、又不正義ヲ撃滅スルタメ正當ナル威力ノ行使モ必要ト認メテイル。日滿支共存ノ素地ヲナス北支ノ所謂明朝化ハ北支民衆ノ力ニヨリ徐々ニ達成サルベキモノデアルガ、コレヲ阻害スル國民黨及ビ蔣政權ノ北支ヨリノ除外ハ威力ノ行使モ亦已ムヲ得ナイデアロウ。

と聲明し、武力によつても華北より國民黨を排除し、ここにロボット政權、第二の滿洲國を建設する意圖を表明した。この多田聲明は九月二十七日、外務・陸海軍・大藏の四省間でも對華外交の基本要綱として承認されている。華北における日本軍は益々増強され、特務機關とこれにつながるシナ浪人、一部中國人の動きは一段と活發になつてきた。

このような日本の侵略にたいしても、南京政府は一面抵抗、一面交渉の政策をとり、日本とたたかうには先ず國內の統一が第一であるとし（安内攘外）、共產軍の討伐に全力をあげ、延安に移動した共產軍に最新鋭部隊をさしむけ、その絶滅にやつきになつていた。

南京政府の軟弱外交にあきたらない人々は、一九三四年五月、宋慶齡・何香凝・王法勤など一、七七九人が署名して、中國人民對日作戰基本綱領を發表した。それは、(一)全體陸海空軍が總動員して對日作戰を行うこと、(二)全體人民の總動員、(三)全體人民の總武装、(四)直ちに抗日軍事費のことを解決すること、(五)工商農學の代表をもつて、全中國民族武装自衛委員會を組織すること、(六)日本帝國主義に反對するあらゆる人を動員すること、を提案し、三ヶ月足らずで、この會に参加するもの三十萬人に達した。六月には對日作戰宣言を發表し、作戰の第一障礙は不抵抗主義であり、第二は國際連盟に信頼し、帝國主義が正義を以て事を處理することを請求することであり、第三は賣國奴の親日政策であり、第四は建設救國であり、第五は中國は無力であるとして、抗日の失敗を主張することであると、全國の亡國の民たらざるを願うものは、

民族・宗教・黨派性別を問わず、この綱領にしたがって反日統一戦線に参加することを求めた^①。この中で建設救國、すなわち安内攘外、内戦に反対し、政黨黨派を問わず、全國人民が統一して抗日戦に参加することを求めたことが注目される。

一九三五年十二月には華北の分離がいよいよ現實の問題となり、華北の各地で日本軍の煽動による自治運動がおこり、宋哲元を中心として冀察政務委員會を設立する動きがあり、宋も「民情に従って」中央より分離することを南京政府に要請した。日本は冀東防共自治政府と冀察政務委員會を中心とし、山西の軍閥閻錫山、山東の軍閥韓復榘を脅迫・懐柔して南京政府から獨立させ、華北に第二の滿洲國を建設しようとした。十二月十六日には冀察政務委員會の成立が豫定された。

このような日本の策動に先ずたち上ったのは北京の學生であった。北京には滿洲から逃亡してきた東北大學の學生が集っており、これらの學生が運動の中心となった。當時華北には中等學校以上の學生が三萬餘人もおり、これらの學生が奮い立った。上海事變いらい、南京政府の陸隣令や維持治安緊急治罪法で抗日もデモも嚴禁されていた學生達は、意を決して起ち上った^②。これが歴史的な一二・九、一二・一六の運動であった。

十二月九日、北京の學生は軍警の壓迫に抗して北京市内に大規模なデモを展開し、居仁堂に赴いて何應欽に冀察政務委員會の成立を中止するよう要求し、十六日、さらに大規模なデモを行い、燕京・清華・北京・師大・輔仁などの學生約二萬人、市民數萬人が参加して市民大會をひらき、(一)防共自治の偽組織には死を誓って反対する。(二)宋哲元は直ちに學生を釋放すること、などを決議した。この學生デモで「打倒日本帝國主義」「反對華北防共自治」「武裝保衛華北」「停止内戦、一致對外」などのスローガンが掲げられたことは、この年八月一日の中國共產黨の宣言(抗日統一戦線の要求)を反映しており、共產黨の影響の強いことが注目される^③。丁度昭和八年夏、北京を訪れた私は、北京圖書館で南方に移送するため大規模な荷造りが行われているのを見ておどろいたのであるが、このころは北京の各大學は南方に移動する準備をしており、北京の空を日本軍の飛行機が自由にとびまわり、防共自治のビラをまきちらし、宋哲元のところには毎日のよう

に自治を要求する團體がおしかけていた（勿論日本特務の御用團體である）。華北はいままさに分割されようとし緊迫した空気につつまれていた。學生はこれに反對して起ち上ったのである。

北京の學生運動は全國の學生に奮起をうながした。十二月十一日には杭州で學生デモがあり、十二日には廣州、十八日には南京・天津、二十日には武漢・上海でも行われた。蔣介石はこのような學生を説得するため、三六年一月十八日、全國の教官代表と學生代表を招いて會見したが、當時北京の學生運動は北平學生團と北京學生連合會に分れていた。北平學生團は共產系で蔣介石の招致に反對し、代表派遣を拒絶した。このため學生代表は學校の命令で、三々五々、人目を盗んで参加しなければならなかった。北京では學生團が壓倒的な力をもっていた。^①

蔣介石に説得された學生たちは一應平靜になったが、これに満足しない學生たちは大學して農村に入り、農民を啓蒙し、組織した。毛澤東の指示にしたがって、一九三六年二月二日、寒風について北京・天津の學生は南下して農村に入った。北京だけでも四百五十餘人の學生が参加した。南下宣傳隊はいたるところで、國民黨軍の妨害にあったが、農民・市民の熱烈なる支持をうけた。彼らが保定に集結したとき、一層強固で永續的な組織の必要なることを痛感し、ここに中華民族解放先鋒隊を組織することにした。この先鋒隊の組織は中國共產黨の指導によるものであるが、毛澤東が「連合政府論」で指摘するように、抗日運動の上で、また中國學生運動史上畫期的なものであった。^②

先鋒隊は宣言の中で、國民の八十%をしめる農民大衆が充分に自覺し、自ら武装して共同抗日することによって始めて活路がひらけることを指摘し、鬭争の目標として、全國の武力を動員して日本帝國主義を驅逐し、民衆の武装自衛組織をつくって、漢奸賣國賊を一網し、傀儡政府を打倒することになっている。そして自らの任務として、

われわれはただ積極的に救亡運動に参加し、救亡運動をおこすだけでなく、同時に一切の救亡運動の中でわれわれは最前線に位置し、大衆の引力となり、一切の犠牲を顧みない。ただこのようにしてはじめて救亡運動を推進し展開できるのであり、鬭争の勝利を保障できる。「畏縮せず、後退せず」がわれわれ各人の先鋒精神である。

と宣言し、「最前線にあつて、一切の救亡闘争に参加する」をモットーとし、そのためには軍事的技術と理論とは自分たちにとって必要な武器であり、軍事訓練をうけて直ちに戦争に赴く準備をしなければならない。自己の軍事技術を習得するだけでなく、廣大なる民衆をも訓練し、武装してたたかい、民族解放の偉大なる力量を養わねばならないとし、小隊を以て基本的な組織単位として三人から五人位で構成し、小隊長を互選することにしてゐる。日本の侵略が切迫するとともに、學生たちは自ら武装し、大衆を指導し、その先頭に立つてたたかう決意をかためた。ことに注目すべきは學生たちはこの運動の中で、「師生合作」をうたい、教官のなかからの進歩的分子と提携し、また宋哲元の二十九軍兵士にもよびかけて、統一戦線をつくっていったことである。われわれが接觸した中國の大學教授、學者のなかにわれわれには到底想像できないことであるが、抗日戦争中に學生と一緒になつてゲリラ隊を指揮してたたかった人が多い。それは毛澤東が「青年運動の方向」のなかで、

青年知識人はある種の前衛的役割をはたしてきた。それは頑固分子をのぞいて、全國のすべての人々のみとめるとおりである。なにが前衛的な役割か。それは指導的な役割であり、革命の隊列の先頭に立つことである。中國における反帝、反封建の人民の隊列内には、中國の青年知識人や青年學生たちによって構成された一部隊がある。この部隊はかなり大きく、死んでいったものを除いても、現在幾百萬人を擁している。この幾百萬人の部隊は反帝、反封建の一方面軍であるし、また重要な一方面軍である。だがこの方面軍にだけにたよるのでは十分でなく、それだけにたよつたのでは、敵にうちかつことはできない。なぜなら、それは主力軍でないからである。では主力軍はだれか。それは勞農大衆である。中國の青年知識人や青年學生たちは、どうしても勞農大衆の中に入ってゆき、全國人口の九十%をしめる勞農大衆を動員し、組織しなければならぬ。^⑤

と指摘する通りである。彼らは中國共產黨の指示に忠實に従つた。

上海でもまた救國運動が急速に展開された。一九三五年後半には文化界、職業界、婦女界などの救國會ができ、上海救

國會に統一された。一九三六年五月には全國の救國會が統合されて全國各界救國連合會ができた。連合會の宣言では、(一)各黨各派は直ちに軍事衝突をやめること、(二)各黨各派は直ちに政治犯を釋放すること、(三)各黨各派は直ちに正式代表を派遣して、共同の救國綱領をつくり、「揚棄前嫌、推誠合作」(今までのうらみを清算して、國共兩黨が共同して日本とたたかうこと)を求めた。

十一月には上海の紡績工場でストライキがおこった。綏遠での日本軍の侵略が始ったが、傳作義軍は百靈廟で日本軍に大勝した。このとき蔣介石は救國會の指導者である沈鈞儒、鄒韜奮など七君子を逮捕する事件があり、全國各地で抗議のデモがおこった。

一九三六年十二月九日、西安の市民學生六、七千人が勦匪總部におしかけて、直ちに綏遠の救援におもむくことを要求したが、このとき蔣介石の命令をうけて説得にやってきた張學良は學生たちの要求に屈して、

自分は亡國の民となりたくないし、抗日をやりたいと思つてゐる。どうか皆さんは私を信じてほしい。私は一週間以内
に事實を以て諸君に答えるであらう。もしその時期を過ぎて、諸君をだましたならば、あなたたちはどこでもこの私を
殺してかまわない。

と約束した。彼はそれまでも蔣介石に共同抗日を要求しつつづけていたが、このとき蔣介石がきかなければ、クーデターをおこすことを決意したのである。^④十二月十二日におこった西安事件は抗日統一戦線の結成される契機となつたのであるが、このころ現地にいた山上正義氏が、

斯様な觀點から日支國交を點検するとき、日支間の最後の斷案を下し得る者は、支那側に於ては、蔣介石に非ずして全國の學生、否北平の學生であると謂えないであらうか。今日の蘆溝橋事件の善後措置が如何に落付くか、今日到底豫想し得可くもないが、結局これも最後の斷案を下すものは宋哲元に非ず、王寵惠に非ず、蔣介石に非ずして實は事件發生の原地北平の學生の手中に(同時に全國學生の手中に)、在るのではないだらうか。^⑤

といっているのは、成程とうなづかれるのである。日本の華北分離の工作も學生を中心とする強い運動のため失敗に終わった。日本は政策の變更をせざるをえなくなった。

さて先鋒隊は結成當時三百人に達しなかったが、一年たらずのうちに六、七千人となり、全國各地に普及した。北京だけでも二千三百餘人、西安二千人以上、天津七、八百人、その他太原・濟南・廣州・南寧・桂林など二、三百人で、遠く日本の東京、パリでも結成された。彼らは抗日戰爭中の學生の根幹であった。^④

先鋒隊は抗日戰爭の第一線に立つ部隊であるから、軍事訓練と政治教育が最も必要であった。それで最初は燕京大學教授の家で游撃戰の經驗のある人から講義をうけたが、それだけでは實戰の役に立たないので、四月二十八日に、清華・燕京の兩大學學生は北京の郊外西山で軍事訓練をうけた。五月十七日には城内の三ヶ區隊の連合演習を行った。七月十日には西山で七日間の訓練が行われ、百六十餘人が參加した。軍事訓練とともに「中國大革命史」「國家と革命」「共產主義運動の中の左翼少兒病」などをテキストとして討論會を行った。「民族解放」「解放之路」「我們的隊伍」などの機關誌を發行するとともに、大衆啓蒙のための演劇なども行った。西安事變後、抗日統一戰線の成立とともに、學生の活動は公然化し、一段と活潑になった。^⑤約一千の學生が延安に向い、北京の學生多數が宋の第二十九軍に入隊した。^⑥このようなり上る學生の要望に應えたのが抗日軍政大學であり、多數の愛國の熱情に燃える學生はぞくぞくとこの大學に集つてきた。^⑦

二

抗日戰爭がおこったころの陝甘寧邊區は二十三縣で、寧夏・甘肅・陝西の三省にまたがり、そのうちの二縣は半分だけ支配していた。その全人口は九十餘萬で、小學校は三百餘校あったが、生徒の數は平均十五人で、貧乏で文盲の多い、中國でも最もおくれた地域であった。私も一九六四年この地を訪れたが、實際この地方は黃土層地帯で、延安の町でも今日なお穴居生活をするものが多く、黃土層の臺地で粟や小麥を栽培している。だから一度旱魃にでもおそわれると

一粒の收穫もない。八月の末には夜になるとシューバーがいるという寒いところである。何其芳も「延安の回憶」のなかで、

二年前紅軍がまだ到着しないころ、ここはあれはてた貧しい町であり、人民の肩にはさまざまの重税が負わされ、毎月一戸當り負擔は數元、數十元におよんだ。だがいまや町の商業は繁榮し、三萬人以上の商人がいる。

一年前に紅軍がすでに八路軍に改編されていたが、人口はまだ四、五千であり、料理屋は四、五軒しかなく、それも木をくりぬいた皿をつかい、木の枝でつくった彎曲した木箸をつかっていた。商店には看板がなく、舞臺にガス燈一つと十數本のろうそくしかなく、簡単な舞踏と活報しかなかった。^④

と述べている。まことにそのような貧しい邊境の町である。

しかし延安は歴史的にこの地方の要衝の地であり、延安市内の鐘樓には「韓范舊治」と書いた扁額が掲げられており、それは宋代、韓琦・范仲淹らがチベット族の西夏とたたかっていたときの根據地であった。戦争中日本の爆撃機の目標となつたあの寶塔はこの町の古さを物語っている。北方オールドスに出る交通上の要衝の地であり、黄土層に包まれた盆地で、軍事上也重要な地であった。しかしこの地が特に衰微したのは、清朝の同治年間、左宗棠の回教徒叛亂の討伐があつてのことらしい。

ところが一九二七年以後、劉志丹・高崗らによってこの地方にも中國共產黨の組織ができ、一九三一年ごろから游撃隊もでき、江西省を出發して抗日のため北上した共產軍がこれと合流して、ここを根據地としてから面目を一新した。「抗日戦争時期解放區概況」には、

陝甘寧地區は一九三一年以前は最も暗黒な地區であつた。人民は長い間軍閥と地主の殘酷な壓政と搾取をうけ、多くの農民は常糧税を納めることができないので、軍閥や地主に捕えられ、監禁された。多くの農民は家を抵當にいれ、妻を賣り、子供を賣つて税金をおさめ、あるいは土地を棄てて逃亡したり、暴動をおこしたりした。……

抗日戦争がおこった前後、中國共產黨の政治的影響力が擴大し、毛澤東は全國人民の指導者となり、中國共產黨中央委員會と毛澤東のいる延安は、全國の自覺ある青年のあこがれの聖地となり、全國の抗日運動の指導の中心となり、幹部養成の基地となった。進歩的青年は全國各地、甚しくは遙か遠くの南洋・インドネシア・マライ・タイ・ビルマ等の地方から、千山萬水をこえて、國民黨反動派の一切の妨害を突破して延安にやってきた。彼らは群をなして中國人民抗日軍政大學、陝北公學、魯迅藝術學院などに入って、常に毛澤東やその他の黨の責任者の報告をきいた。そしてここから出發して、南北各地の日本軍の背後に入って、活動した。中國人民抗日軍政大學は一九三六年にこの學校が開設されてから、一九三九年に華北の日本軍占領地に移動するまでの期間に、數萬の幹部を養成した。彼らは抗日戦争中に各地の根據地で日本軍との戦争の根幹となったのである。

と述べている。實に延安は活潑で聰明な青年のあこがれの的となり、メッカとなった。これらの青年の中には先鋒隊員も多數ふくまれていた。延安は政治・軍事・文化の中心となり、范文瀾・成仿吾・丁玲などの學者文化人も集っていた。范の名著「中國近代史」(上册)も一九四五年、延安で書かれた。

抗日軍政大學は一九三一年の秋、第三次攻撃を破つてのちでできた紅軍學校がその前身であった。それが一九三三年十一月、瑞金の森林中にできた紅軍大學となり、さらに長征とともに陝西の保安縣瓦窑堡に移動して、中國抗日紅軍大學となり、西安事變後抗日統一戦線が成立したので、延安に移動し、また單に紅軍の幹部を養成するのではなく、共產黨員でなくとも、抗日戦争に挺身する人材養成を目的とするようになったので、中國人民抗日軍政大學と名稱をあらため、略して抗大といわれた。

その第一期生は三百ぐらいで、多くは紅軍の幹部で、教員は三人、教室も机もなく、煉瓦を積み重ねて腰をかけ、膝の上で筆記した。抗大の教育委員會主席は毛澤東で、校長は林彪、しかし校長自身も生徒であるという珍らしい學校であった。學生には紅軍一、二、四三ヶ方面軍と西北紅軍幹部がいたので、十餘年來の革命戦争の經驗の交流ができた。このこ

るエドガー・スノウがこの地を訪れたが、彼は「中國の赤い星」の中で、教育の内容は政治知識、中國革命の諸問題、經濟學、黨建設、共和國の戰術、レーニン主義と民主主義の歴史的基礎、日本の政治・社會的基礎などで、軍事課程では抗日戰爭における戰術の問題、日本軍にたいする奇襲戰、抗日戰爭における游擊戰などであると述べている。第一期生は軍人が多かったので政治教育に重點をおいた。

第二期生となると、軍隊の幹部とともに、全国各地から幾百人の學生が集つてきて、一千人以上に達した。このころ抗日大學を訪れたニム・ウェールズは、

第一期生は千四百人で、希望者があまり多かったので全部の希望に應じきれなかった。一隊約百名の十二隊に分けた。一九三五年の學生運動のあいだに北京で知った一ダースほどの學生達もいた。そのうち二人は燕京大學からきた者だった。東北出身の學生は約百人だった。千四百人中、女子學生はわずか四十人であったが、みな非常にすぐれた學生で、人數がたりないところを卓越した能力で埋め合せた。

と述べている。北京の學生運動に参加した學生や東北出身の學生の多いのを見ると、その人たちは多く先鋒隊員であったであろう。そして「回憶紅大、抗大和軍大」を書いて私たちに生々しい記録を残してくれた何長工は實にそのころ女子學生の教育を擔當していた。彼は一九二一年からの黨員で、長らくフランス、ベルギーに留學していた人である。ここでニム・ウェールズが第一期生といっているのは、第二期生の誤であろう。彼女がソヴイェット地區に入ったのは三七年の四月末のことであり、學生の人數からいっても、そうならざるをえない。

第三期生となると、抗日戰爭も勃發しており、學生の數は一舉に二千人にふくれ上った。當時の狀況を何長工は、抗日戰爭が爆發した。われわれの民族は嚴重な災難に直面した。民族の危機はわが國の廣大な青年を激動し、彼らは延安にやってきた。延安は黒闇の中の北極星であり、鮮やかな旗であった。彼らはここに光明を求め、眞理を求めてやってきた。彼らは松花江畔から、五指山の山間から、峨嵋山の下から、そして黄河々畔からやってきた。延安に通ずる道

路では、青年達は群をなしてやってきた。國民黨反動派は彼らを封鎖したけれども、抗日救國の熱情は、あらゆる手段を講じてこの封鎖を突破した。^⑧

とのべている。抗日軍政大學が延安に移動したときには、そこにはこわれた穴居住宅、廢墟となった廟、そして牛子屋や馬小屋しかなかった。學生達はそれをきれいに掃除し、修理して教室とし、寄宿舎とした。物質的條件は瑞金よりずっと悪かった。そんなところに、二千人の學生を迎えた。しかし彼らはたち上って、洞窟を掘り、教室をつくり、寄宿舎をつくった。相互扶助と集團學習もだんだん軌道に乗ってきた。抗日戰爭もはじまっているので軍事訓練に力をいれ、卒業すると直ちに前線に馳せ参じた（朱克倫「延安抗日軍政大學での日々」『人民中國一九六六・二』はこの三期生の思い出である）。

第四期生になると五千人に近くなった。彼らは殆んど全国各地から集ってきた労働者、農民、資本家の子弟であり、各種の特殊技術をもっていた。その職業には、文學者、音楽家、美術家、演劇家、映畫俳優、歌劇俳優、新聞記者、辯護士、醫師、教務員などがあり、種々雑多の人であった。彼らの多くはプチブル知識分子であった。しかし彼らはここで、學習し勞働し、軍事訓練と演習をやるうちに、青年達は鍛煉され、身體は強健になった。粟が食べられない連中も食べるようになり、一つの班は一つの皿にもった料理を一緒になって食べ、身體も變つてき、顔色もよくなった。多くの病氣もいつの間にかよくなり、不眠症もなくなり、體重もふえてきた。彼らの行動上のロマンチックな惡習、工作上の緊張のないこと、生活の困苦に耐えられないなどの、プチブルの弱點を克服し、組織性、規律性、團結性に富む戰士にきたえられていた。延安の河畔では青年達は大きな聲で歌をうたい、談笑し、バレーボールなどの競技を楽しんだ。死んだような延安の町は、活氣に溢れる青年の街となった。ここは青白い都會のインテリもたくましい青年に教育する熔鑪となり、青年達のあこがれの的となった。小説「引力」の主人公も重慶に失望して、解放區の延安へと旅をつづける。^⑨

「陝北における教育」のなかに、陝北公學で戀愛を裏切られた學生が愛人を殺したとき、このことが大衆討議にかから

れ、本人は直ちに前線に出動して、奮戦戦死して罪を償いたいと懇願したが、革命の規律を破った罪は許すことはできないとして死刑になった話が記録されている。一切の小ブルジョアの個人主義は許されなかった。

思想改造は學生の相互批判を通じて行われた。課業のおわった夕方、休日などには延河々畔を散歩しながら話し合い、意志の薄弱な學生も友人の激勵と助言によって逞しくなり、みんな前線に出動して、一切を犠牲にして祖國のためにたたくことを希望するようになった。

當時延安に入るには非常な困難があった。日本軍占領地帯の後方を迂回しなければならなかったからである。南方からくると、香港・梧州―柳州―貴陽―重慶―成都―寶鷄―西安―延安というコースをとり、成都・寶鷄間で一ヶ月を要した。西安から延安までバスで十圓、徒歩で十二日を要した。多くの貧しい學生はバスも利用せず、長い道中を歩いて延安にやってきた。國民黨軍や日本軍の包圍をも突破しなければならなかった。それであるのに、多くの困難と危険をおかして、青海・チベットを除くあらゆる地方から學生がやってきた。海外のシンガポール、マレーシア、朝鮮からもやってきた。私も戦争中に舊滿洲國の學校に勤務していたが、そこでも優秀な學生は次々と姿を消して延安にでかけていった。延安では非常に特殊な教育が行われているということであった。滿洲から延安に入るルートがちゃんと通じていたのである。抗日大學では定員が一杯になったので、西安にいたるすべての電柱に、「抗大學生募集停止」というピラをはったが、それでも依然學生の波は跡をたたなかつた。

抗日軍政大學は廣く抗日戦争の指導者を養成する學校であった。その入學資格も、(一)黨派・信仰を問わず、民族解放運動に獻身しようとするもの、(二)初級中學・高級中學・大學卒業、または同等の學力を有するもの、(三)身體强健で、不良の嗜好、及び傳染病のないもの、(四)年齢は十八歳以上三十歳まで、とし、學資の免除があり、食事・宿舍・服裝等一切學校から支給され、入學手續では學歴證書、その他證明文獻、本人の寫眞が必要であり、簡単な試験も行われたが、學力よりもむしろ闘争經歷、抗日意識に重點をおいて選抜した。「延安求學記」の著者馬國昌も組織から推薦されて進學してい

る。食事は殆んど學生のつくった農産物で自給し、粟と野菜、一人當りの経費は僅か八元であった。服装もすべて灰色の軍服で、男も女も同じ服装。それも自ら棉をつくり、紡織して、染め上げた布を使用したこともあった。延安の革命博物館には、彼らが自ら作った軍服、靴下、手袋などが陳列されている。學校は平房で、學生の一部は穴居。學生は自分でつくった一つの腰かけをもっていて、講義のときも、食事のときもそれを使用した。北京の革命軍事博物館にはその腰かけが陳列されている。全く質素そのものである。學生は、入學するとき、インキ、鉛筆、紙などの文具、冬衣、夏衣、長靴下、肌着、タオル、ハンカチ、練齒磨、齒ブラシ、石鹼など一年分を持參することを要請されている。國民黨の包圍下では物資が極度に缺乏していたのである。學生達は桃の實でソロバンを作り、時計がないので日時計を使用した(馬列學院)。藥莢でペン軸をつくり、紙もないので石板に筆記したりした。電燈がないので、暗い洞窟の中で棉の實からとった油の灯火のまわりに、數人の學生が集って讀書した。毛澤東自身もろうそくの明りで、あの「矛盾論」「實踐論」などの哲學論文を書いた。油を節約するため考えるときにはランプのしんを一番小さくしたという。教官も學生も同じような生活をし、畠を耕して汗を流し、農民と全く同じような生活をしていた。だからこそ、彼らは農民の中へ直ちに入ってゆけ、その中にとけこむことができたのである。學生の學力には非常な差があったが、相互扶助と集團學習で、互いに助け合い、みんな同じような水準に到達することができた。全く世界に、その例を見ない特色のある學校であった。

抗日軍政大學の教育の方針は、「確固とした正しい政治方向、困苦缺乏に耐え、質素を旨とする作風、弾力性をもち機動性に富む戰略と戰術」。校風は忠誠・團結・緊張・活潑で、その校章も赤地に抗大という字の入った金の星、そのまわりにこの四つのモットーが書かれていた。その教學の原則は、「理論と實際との結合、少にして精、短にして少」で、現實と密着した知識のエッセンスを、できるだけ短期間に習得することであった。そして教學方法としては「啓發、相互扶助、集團學習」であり、非常な短期間のうちに集中的な講義と訓練を行った。

學生には種々雑多の人がいたので、軍人出身のものには政治教育を、學生や一般の人々には軍事訓練を主として行っ

た。講義のやり方は手近なところから遠きに及ぶ。たとえば中國革命史でも、二十七年からの大革命時代を先ずとりあげて、その問題点を指摘し、そこから五四運動、太平天國へとさかのぼる。第二は、具體的なものから抽象的なものへ。公式主義を排し、あくまで事實にもとづいて考える。さらに中心点を要約し、學生は集團で討議して理解を深めた。時には特別講演があり、毛主席・劉少奇・朱德・林彪・徐特立などが報告を行った。林彪の抗日戦争に関する講演など、午前九時から午後二時まで、その間しばらくの休憩を置いて、五時間に互るものであった。毛澤東の「中國革命戦争の戰略問題」「實踐論」「矛盾論」などもすべて抗日軍政大學での講演であり、入學式と卒業式には必ず出席して激励した。彼は學生の卒業證書に、「勇敢、堅定、沈着。鬭争の中で學び、いつでも自己の一切を犠牲にする準備をせよ」と書き與えている。彼がいかに抗大の教育に熱心であり、いかに期待するところ大であったかを物語っている。前線から歸ってきた軍人が生々しい戦争の經驗を報告することもあった。

日課は五時半起床、朝の體操三十分、朝食後三科目の講義、晝食、午後は隔日に二科目の講義があり、男子は教練、女子は看護法を學んだ。夕食後は自習。九時就寢であった。討論會は最もさかんで、董必武が二週間にわたってトロッキイ批判を討論したこともある。

延安では人間と人間と何の壁もなく、兄弟のように親しくしている。この學校の特色は、

- 一、他のところでは金のあるものでないとい入れない。しかしここでは全ての人に門戸がひらかれている。
- 二、ことあれば一緒にし、飯あれば一緒に食べ、食べるものも着るものも、すべて樸素であつて、校長から小使にいたるまで、みんな平等である。

三、民主的であり、一切の校務や教務は多數の人の意見にしたがい、法律は人民的である。

といわれ、毛澤東も、

今日の參會者の大多數は幾千里、幾萬里のかなたから來ている人々であり、性の差別なく、みんな心一つにしてい

る。これでも全国の模範だといえないだろうか。延安の青年たちはじぶんらが團結しているばかりでなく、勞農大衆と固く結びついている。この點はよりいっそう全国の模範である。^④

と語っているが、毛主席自身もよく農民と話し合い、氣輕に學生の中に入って語り合つた。毛澤東は、

現在は一方で學習すると共に一方で生産し、將來は一方で作戦しながら一方で生産する。これが抗大の作風であり、いかなる敵にも勝つことができる。^⑤

と激勵している。彼らは鋏をふるって荒地を開拓し、生産に汗を流して、自給自足しながら、勉學した。こうしてこの學校で學習した學生達は卒業と同時に戦線にはせ參じた。この學校を卒業した學生は十餘萬とも二十餘萬ともいわれている。何長工が、

中國人民抗日軍政大學は偉大なる祖國の革命産業と軍事政治方面に、二十幾萬人の幹部を養成した。この二十幾萬の幹部は偉大なる抗日戰爭で巨大なる作用をなし、どの戰場でも、どの工作部門でもすべて効果的な成果をあげた。これが中央が抗大を特別に重視した理由である。黨の教育と工作の中での學習を通じてその大部分はわが軍隊の重要な骨格となり、省・市の各部門の責任者となっている。抗大は人民の抗日戰爭の勝利のなかで益々發展し、その歴史的使命を果したのである。^⑥

と評價・結論しているが、彼等は卒業と同時に、

抗戦いまだけなわ、

古きものにとらわれず、

いかなる犠牲にもおそれず、

.....

強盜日本の野獸とたたかい。

わが中國の大地よりおわん、中華の英雄の子らは、戦場で慷慨し誓う。

日寇をうたずして故郷の土を踏まず、君らのあとは我ら必ず繼がん。

また會おう。戦場で、

の校歌をうたいながら、前線に散っていき、八路軍に入り、農民を組織し、ゲリラとなって戦った。

一九三八年十月、國民黨の包圍が強くなったので、抗大總校と第一分校は太行山脈の中へ、第二分校は晉察冀邊區の阜平縣に設けられ、解放區の擴大とともに十二分校も設置され、多くの優秀な幹部を養成した。すでに一九六六年抗日軍政大學の三十週年に際して、葉劍英は抗大を模範として大學を改革せよと呼びかけているが、現在文化革命の過程で生れつつある新しい學校は實にこの抗大をモデルとしている。抗大の教育精神は今日もなお生き續けている。抗大こそは中國人民の要求に應える學校である。これを指導したのが毛澤東であることを思うと、彼は優れた政治家であるとともにまた比なき教育者でもあった。

三

「救亡手冊」というハンド・ブックは日本軍占領下の上海で、一九三七年十一月に編纂され、生活書店から出版された。私は偶然の機會にこの書物を手にいれたが、上海は陥落し、日本軍は南京に向って進撃し、中國内部でも和平の空氣が強く、民衆は非常に動搖していた。このような情勢の中で、緊急の必要に迫られて張仲實氏らの提案によって、若い活動家の手によってこの抗日運動の手引書がつくられた。

これは二二五頁の小冊子であるが、その内容は第一編救亡理論、第二編救亡史實、第三編救亡實踐、第四編附録、とかならなっており、工作中におこってくる種々の困難を克服する具體的な辦法を説明しており、活動家によって肌身離さず手

許におき、繰返し熟讀したものとされる。いうまでもなく、日中戦争は國民黨正規軍ではなく、民衆を戦争に動員することによって確保された。戦争中の中國學生、知識人の活動を知る上で貴重な史料と思われるので、以下その内容について紹介して見たい。

當時いろいろの抗日理論が展開されていた。その中には、歪曲的抗日理論として、

一、絶對的樂觀論 戦争が長びけば日本で革命がおこる。帝國主義は没落期にあるので自然に崩壊する、というのである。しかしこの理論は誇大・狂妄を招き、漠然たる信念に頼って自分の努力を怠る。自ら努力するのではなく、帝國主義の崩壊をまつのは危険である。

二、帝國主義戦争論 今度の戦争の目的は、日本を滅すことであり、中國がアジアの主人公となることである。それは日本の侵略にたいする報復であるとする。しかしこの意見はまちがっている。われわれはあくまで自己の主權を守るために戦っているのであって、われわれの敵は日本帝國主義であつて、日本人ではない。

三、機會主義抗戰論 中國は自らの力で勝利する自信がなく、日ソ戦争、日米戦争があつてはじめて勝利することができ。日本で革命がおこり、英米佛ソが一致して中國を支持することによって始めて勝利できるとする。しかしこれらの條件がなければ抗戰できないが、各種外的な條件はわれわれにとって有利である。しかしそれがなければ勝利できないのではない。われわれの主體的な力量を強調すべきである。奴隸化され、侵略されているのはわれわれである。だから中華民族の解放はわれわれの神聖な事業である。他人に依存することはまちがいである。

四、痛快主義と悲觀主義的抗戰論 彼らは抗戰に賛成し、速やかに勝利できるとしている。それであるから、一旦不利になるとすぐ悲觀してしまふ。これはプチ・ブルジョアに多く、動搖的である。戦争は長期的である。だからこの考え方は、不利になると悲觀して投降する危険がある。

次に漢奸の理論としては、

一、日中親善論 彼らは日本はアジアの先進國であるから、提携すべしという。しかしそれは中國を日本に賣渡すことである。

二、唯武器論 日本と中國とを武器だけで比較して、中國は到底日本に敵しえないという。しかし武器が勝利を決定しないことはソ連の革命でも、北伐でも證明されている。唯武器論は不必要な恐怖をおこさしめ、抗戦を斷念せしめる。武器を使用するのは人間であつて、武器は決定的な要因ではない。

三、五十年抗日論 日本帝國主義は強大なので、今しばらく時期をまち、準備しながら戦へという。これは日本が中國を滅亡しようとしているとき、問題にならない議論である。

四、弱國犠牲論 最近戦争が始つてからこの意見が多くなつた。日本は強國であるから、中國は戦つても敗けるだけであるという。しかしこれは誤っている。第一に日本帝國主義を過大に評價し、その内部に矛盾のあることを忘れてゐる。第二に武器の比較からだけ論じ、人間を忘れてゐる。第三に主觀的力量が増大したとき、形勢が逆轉することを忘れてゐる。五、唯軍事論 抗日戦争には軍事だけが必要で、他は必要でないという。しかし今日の戦争は多面的で、政治・經濟・文化あらゆるものを動員すべきであり、兵隊も人民の支持があつてはじめて戦えるのである。従つて單純な軍事論は誤である。

六、左傾的失敗主義 彼らは左傾的傾向を示しながら、實は抗戦に反對している。彼らはいふ、「政府は面子のために闘つてゐるので、失敗主義的準備をやつてゐる」、「資本家・地主・知識分子・農民は戦いえない」、「救亡團體は信頼できない」、「農民を戦わせるには土地の解放が必要である」、「各國は中國を援助しない。ソ連は口先だけであり、英米佛はわれわれの敵である」と。彼らは資本家にも地主にも反對し、自分たちだけが戦うという。抗日統一戦線に反對し、國民黨・共產黨とも反對する。これでは抗日統一戦線を破壊するだけである。

當時は實にいろいろの抗日・降日の理論が行われていたのである。これにたいし、「救亡手冊」は次のような見通しを

立てている。

先ず當時の國際情勢について云えば、先ず第一にソ連との關係である。中國の抗戦後、世界情勢は大いに變化した。その中で中ソ關係の變化は注目すべきである。過去において中國とソ連には通商關係はあつたが、反侵略のために、手を握るに至らなかつた。ところが日本の大陸侵略が中國を滅亡するだけでなく、ソ連を攻撃しようとしていることが明らかになつたので、不可侵條約を結ぶに至つたのである。

次に英米の立場はどうか。抗戦いらい英米が中國でもっている政治經濟勢力はすべて相當に被害をうけているので、過去に彼らもつていた諒解や容認ももはや繼續できなくなり、相當な變化がおこつてきた。

英國は日本の友好國であり、滿洲事變では相當の理解を示したが、今度の戰爭では中國に相當の同情を示した。英國の利益が侵害されたからである。しかし日本に完全に屈服するか、中國を支持するかの岐路に立っている。米國はどうか。米國は孤立政策をとつていたが、日本の侵略戰爭はその政策を放棄せしめた。それで非戰條約、九ヶ國條約の原則に反するとして、日本を攻撃している。ルーズヴェルト大統領は、シカゴの演説で、日本は「目に法律なし」「人を蔑視し」「平和を破壊し」「世界文明の基礎に危害を加えているので、一切の平和愛好國と共に一切の可能な措置をとること」によつて侵略を阻止すると演説している。

このような國際的な平和戦線にたいして、獨伊日の三國防共協定ができ、世界平和を破壊し、第二次世界大戰をおこそうと計畫している。こうして中國の抗戦いご、中國に有利に、そして侵略國と平和勢力の對立は段々激化している。

しかし一部の人は中國の將來について絶望的になつてゐる。第一にわれわれの物質條件は日本に及ばない。精兵はなく、武器はなく、敵人の新兵器にかなわない。第二に開戦と同時に敵は海岸を封鎖したので、税關収入は減少し、財政は維持できない。第三に國際的な援助を期待できない。かういふことから、この人々は抗戦に勝利することはできないと見ている。しかし一方では樂觀的な見方をする人々もある。第一に敵の人口はわが國に及ばない。その中に矛盾もある。第

二に敵は資源に缺乏している。長期戦はできない。第三に國際的に孤立しているので、外國の援助は少いといふのである。

しかしこの二つの議論は誤である。わが國の勝利は人口の大や、資源の豊富なことに依存するのではなく、それは全國人民の努力に頼らねばならないし、若し全國人民が努力しなければ勝利することができない。勝利するか否かは全國人民の闘争にかかっているのである。

わが國の勝利には次の三つの條件が考えられる。第一は抗日民族統一戦線の強固なことである。第二は日本の侵略が英米佛の利益を破壊し、彼らが自己の利益を守るために日本に對立し、またソ連についていえば、中國侵略はソ連侵略の根據地をつくるのであるから、傍觀しておれない。それで英米佛が反日戦線をつくるならば有利になる。しかしこれはわが國が徹底的に闘うことによつてできるのである。第三は日本人民が軍閥の中國侵略に抗して立ち上ることである。そのうち最も重要なのは、中國人民の連合である。

戦争の決定的な要素はわが國の徹底的な抗戦である。それはたとえば、一つのもつれた漁網のようなもので、網の網はわれわれの手にある。ただわれわれが一年または一年半にわたつて繼續抗戦することによつてこの漁網は整理され、使用することができるのである。

以上述べた抗戦の理論はきわめて明晰であり、あくまでもこの困難な戦争と自力で戦いぬこうという決意に感銘をうける。戦争は實にこの通りに進行した。毛澤東の「持久戦論」の出たのは一九三八年である。「持久戦論」によつて抗戦の見通しはじめて理論化されたのであるが、それまでにこのような討論がさかに行われ、それが結局毛澤東によつてまとめられた。抗日軍政大學でもこのような問題が、最大の課題として討論され、正しい結論に達し、自信をもつて戦線にとび出していったのであろう。それにしても中國人は、日本人は短見で、目先のことしか見えず、木を見て森を見ない、そのため大局を見誤ると批判しているが、ここにもそのちがいはっきりと出ている。毛澤東とニクソンの話し合いが行

われようとしているのに一生懸命にどうして中國の國連加盟を阻止しようかと考えあぐんだ日本政府なのである。

次に救亡工作について紹介すると、農村工作・學生工作・婦女工作・職員工作などに分けて説明している。そのうち農民工作について説明すると、農民の態度は階層によって異っている。第一は雇農・貧農である。この人々は農村で絶對多數をしめており、その態度は堅決で徹底的である。彼らは日本帝國主義の侵略によって脅威をうけることが最大であり、敵人によって毆打され、奴隸のように使われるのも彼らである。その意味で貧農・雇農は農民抗戰の主力であり、われわれの工作も彼らを主要な對象としなければならぬ。第二は中農・富農である。この階層も抗戰に参加する。しかし彼らの經濟的地位は、地主と小作人の中間に位し、その態度は動搖しており、抗戰態度は充分に積極的ではない。だから彼らに對しては充分に注意し、種々なる方法で教育し、彼らの態度をしっかりとさせねばならない。第三は地主紳士である。彼らは農村の支配階級である。彼らの利益は絶えず農民と對立・衝突している。しかし民族の危機は一切より高く、このような内部的矛盾は自然第二義的となる。だが彼らの經濟的利益から敵に買収され易いので、常に彼らの投降を防止し、ひきつけておくことが必要である。

農民はその土地の事情にも通じているので、その一部は保衛團として游擊戰に参加させるとともに、交通運輸隊・諜報嚮導隊・洗衣縫紉隊・救護擔架隊・工程隊・出征家族服務隊などとして協力させることが必要である。

農村の工作で特別に注意しなければならないのは、第一に農民自身の生活の利益から始めることである。抗戰救亡は勿論神聖な事業である。しかし農民の政治認識がおくれているので、直ちにその眞意を理解することがむづかしい。そこで宣傳工作をするときには生活の利益から出發し、それを抗日救國に結びつけてゆかねばならない。第二は農民の特性を理解することである。農民は勞働者と異なる點が多い。彼らには團結の經驗が少く、團結の力量が理解できず、散漫で無組織である。また農民は眼前の小惠のために、ほんとうの任務を忘れることがある。これらの點は特別に注意することが必要である。第三は工作の態度である。私たちの態度は、誠懇で忍耐づよくなければならぬ。農民を説得するには相當長

期の過程が必要である。われわれは失望することなく、困難を克服し、絶対にいばることなく、農民の一員となり、農民の中で生活し、服装や言語も彼らに學ぶことが必要である。第四には、工作の協力者をうることである。小學教師・失業學生・都市から歸ってきた店員、職員、労働者等々は政治意識も高く、工作における最高の伴侶である。私達は彼らと密接な連絡をとりつつ、工作の基礎をつくり、その發展を保證することが必要である。

以上は農村工作の要領であるが、實に具體的で要領をえている。その他游撃戰爭についても實に簡にして要を得た説明をしている。

こうして中國の學生は教師と一體となつて抗日戰爭に参加した。一二・九運動の指導者黃敬は冀中根據地の建設者であり、楊學誠は中原解放區をつくつた。山西省五臺山を中心とする約十五萬の游撃隊の半數は先鋒隊であつたといわれ、そのほか山西省で七萬、河北省で約八萬の隊員がいたという。これらの先鋒隊は北京大學その他の進歩的教授を指導者として活動し、教授と學生とが一體となつて抗日戰に大きな役割を果したのであつた。

中國における學生運動については、山上正義氏は、

支那における學生運動は直ちにそれが支那における國民運動の一切である。——と謂うことは餘りにも言い過ぎであるか？ 四千年の歴史を顧みて、それが國民的運動の形態を採つた幾多の事實を仔細に點檢したら、それが悉く當時の讀者による、書生による、所謂學生運動であつたと謂えないだろうか。近くは民國以來二十數年の事例に就てもまた同様のことが謂えないだろうか。

國民黨史を翻いてみてもよい。國民黨が民國前十八年、興中會としてまず第一卷をあげて以來、中國革命同盟會となり、中華革命黨を経て今日の中國人民黨となるまで約四十年間の發達史は、或る意味でこれまた最近四十年の支那學生運動史であると謂えないだろうか。……

遠く過去を溯ることは今避けるとしても、民國以來の顯著な幾多の事實に就て考えても、支那の社會における所謂知識

階級の位置と努力、教育普及の程度、言論機關の發達程度、言論自由の範圍等からして國民運動即ち學生運動であり、學生運動即ち國民運動であると謂つても過言でないと思ふのである。

と述べている。一九二五年いらい労働運動が昂揚し、國民運動の主體は労働運動となつた。しかしその指導力は學生が握つていたのであり、彼らは啓蒙運動・大衆運動を組織するだけでなく、自ら軍事技術を習得して、労働者・農民と一體となつて戦つた。抗日戦争を通じてはじめて知識階級は農民・労働者と固く結びつくことができた。そして抗日戦争の中で解放區を擴大し、人民中國建設の基礎をつくつたのであつた。そのような人材を養成したのが抗日軍政大學であつた。

結 語

中國における教育活動は五四運動を契機として、從來の帝國主義の支配、封建勢力に奉仕する教育から、人民のための教育へと轉化していった。平民教育活動、そして教育權回收運動がそれである。一九二四年の國共合作によつて黃埔軍官學校や農民運動講習所ができ、革命の戰士を養成して、北伐軍の主力となつた。國共分裂後はソヴェエト區の紅軍學校、紅軍大學となり、それが抗日軍政大學へと發展した。毛澤東をはじめとする中國共產黨指導者の抗日軍政大學にたいする熱意は、教育・人間改造を通じての新しい中國の建設であつた。その教育の中心は抗日軍政大學であり、抗日戦争に勇敢な幹部をおくり、人民解放戦争、そして新しい中國の建設の推進力となつてゐる。抗日軍政大學がプロレタリア文化大革命後の新しい學校のモデルとなつてゐるのもそのためである。

アメリカの中國研究家フェアバンクスは、中國には革命によつて何ら失うものがない無學だが聰明な農民と、長い間農民を支配してきたエリート、讀書人があつた。讀書人の生活を規定するのが儒教であり、農民には權力の暴虐から自らを守る秘密結社の組織があつた。この讀書人に代つたのが近代の學生であり、彼らはマルクス・レーニン主義を身につけることによつて、農民と結びつき農民を組織して革命をなすとげたと説明してゐる。中國の學生は長い間の鬭争の中で、勞

働者・農民の力を認識し、農民・労働者と一體となることによって偉大なる革命をなしたとげたのであった。それは非常に長い苦しい闘いであった。そしてそのような學生を育て、指導したのが毛澤東思想であり、世界に類を見ない特色ある抗日軍政大學であった。

註

① 「從九一八到七七國民黨的投降政策與人民的抗戰運動」(抗戰的中國叢書之六) 上海人民出版社、一九五八、二二八～二三六頁。

② 菊池貴晴「中國民族運動の基本構造」三九七～三九八頁。

③ 秦郁彦「日中戰爭史」五六～五七頁。

④ 「從九一八到七七國民黨的投降政策與人民的抗戰運動」一四二頁。

⑤ 危害民國緊急治罪法は一九三一年一月に、危害民國緊急治罪法施行細則はその年の四月にでた。その中では、

叛徒を組織して治安の攪亂を計畫するものは死刑に處す。とし、凡そ人を煽惑して治安を亂し、叛徒を組織するもの、文字圖書・あるいは演説を以て叛民に宣傳するものは死刑又は無期懲役とする。と規定しているが、後には主として抗日運動にこの法律を適用した。

又陸隣令は最初一九三五年六月に、敦陸隣邦令として出され、三六年九月陸隣令となり、さらに維持治安緊急辦法が出た。その中では、

凡そ文字・圖書或いは演説を以て反日宣傳をなすものは、妨害邦交罪に處すとし、一切の抗日運動を禁止している。

これらの法律は日本の要求によるものであったことはいうまでもない(參照、從九一八到七七國民黨的投降政策與人民的抗戰運動)。この法律の適用によって新聞で發表されただけでも三十萬人の青年が殺され、北京大學の帝國主義研究會、清華大學の現代座談會が解散を命ぜられた(平清十校學生自治會宣言、一九三五)。

⑥ 一二九運動については、

「一二九運動」(中國現代史資料叢刊)、人民出版社、一九五四。
楊述「記一二九」北京出版社、一九六一。李昌第「一二九回憶錄」中國青年出版社、一九六一。中西功、西里龍夫「中國共產黨と民族統一戦線」
などに詳細な記述がある。

⑦ 山上正義「北支の學生運動」抗日支那の解剖(日本評論 臨時増刊號 昭和十二年八月所收)

⑧ 南下宣傳團については上記一二九運動の文獻に詳しい。

⑨ 中國現代史資料叢刊「一二九運動」の中の中華民族解放先鋒隊文件は最も貴重な資料である。

⑩ 毛澤東「青年運動の方向」選集四。すでに一九三五年十二月十七日の瓦窑堡の活動者會議で毛澤東は、

學生運動はすでに大きな發展をしめしているが、將來はかな

らずさらに大きな發展を見せるであろう。だが學生運動が持久性をもち、賣國奴の戒嚴令や警察・スパイ・學生ゴロ・フアンストなどの破壊と虐殺政策をうち破ろうとするには、その闘争を労働者・農民たちの闘争に呼應させる以外にないとの指示をあたえているし、魯迅は、

學生の自發的救亡運動の波が全國に澎湃として高まりつつある現實の中から、はっきり見出すことができる。帝國主義の強められる進攻、漢奸政府がおこなう民族と國土の加速度的賣却、民族危機の深刻化につれて中華民族中の奴隸となるを願わない大多數の人々は、すでに目覺めて立上り、民衆は鐵拳をうち揮つて、敵がわれわれに與えた半植民の鐵鎖をぶちこわしつつあることを、とくに學生は感覺のもつとも鋭い半植民地民族解放闘争の前衛戰士である。だから彼らの自發的救亡運動は容易に影響をおよぼし、光明と暗黒の岐路にさまよっている全世界に影響をあたえるであろう。今日の學生運動にあらわれたいろいろの事實から見ると、すでにかれらは民族解放闘争の前途に横たわるいっさいの敵をはっきり知ることができ、下層に深入し、かれらの必要とする體驗的生活を體驗し、農民・労働者を組織し、これらの民族解放闘争の主力部隊に働らきかけることを知っている（光明二號）と評價しているという（平野義太郎「アジアの民族開放」二七七一―二七八頁）。

- ⑭ 前掲「從九一七到七七國民黨の投降政策與人民的抗戰運動」一四七頁。十一月二十四日北京各大學の學長蔣夢麟や教授傅斯年・胡適などが、

近來世上に民意を偽造し、國家の統一を破壞する運動が見ら

れるに鑑み、我々北平教育界の同人は鄭重に宣言する。……我々は中央より離脱し、或は特殊な政治機構を組織せんとする一切の陰謀行爲に斷乎として反對するものである。我々は政府が全國の力量を適用して國家の領土・行政の保全を維持せんことを要求する

と宣言して、日本の華北分離策動に反對し、日本軍の脅迫に屈しなかつた。三六年一月二十三日には北平文化界救國會ができたが、それには馬敘倫や許壽裳など百五十餘人が參加した。しかし周作人と錢稻村は參加していない（中西功・西里龍夫「中國共產黨と民族統一戦線」六二―七二頁）。

- ⑮ 李連璧「古城怒火―憶西安事變前後的西安學生運動」（前掲一二九回憶錄、所收）。

なお、このころの西安の狀況についてはスノー「中國の赤い星」に詳細な記述がある。

- ⑯ 前掲 日本評論所收、山上氏論文。

- ⑰ 「從九一八到七七國民黨の投降政策與人民的抗戰運動」一四六頁。

なお先鋒隊の活動については「一、二九回憶錄」の李昌「回憶先鋒隊」が最も詳細である。

- ⑱ 李昌「回憶先鋒隊」

- ⑲ C・ジョンソン著田中文藏譯「中國革命の源流」六六頁。

- ⑳ このころの學生運動と接觸していたエドガー・スノーは「目覺めへの旅」の中で、

一九三五年から一九三六年にかけて行われた學生の抵抗運動は中國の無抵抗主義の終末をつけるきつかけとなった。直ちに

最大の影響を受けたのは、北京に亡命していた滿洲人である。

都市のデモを農村にまで波及させるに最も活躍したのは東北大學の學生たちだった。休暇になると多數の學生が農村に入りこみ、祖國が日本に侵略されている事實を傳へ、戦争の準備をするよう熱心に説いてまわった。あるものは西安府にゆき、蔣介石の「紅匪討伐」總司令の副司令官となっていた滿洲からの亡命中の張學良を訪ねた。張將軍は彼らを歓迎し、宣傳工作員に雇ったのである。間もなく東北大學それ自體が西安に移ったのだが、それからしばらくしてここで起った事件は遂に蔣介石をはっきりと反樞軸側に立たせることになったのである。……

この重要な時期に國府が指導と啓發の力強い役割を全く果し得なかつたことは國府を悲觀と退縮と抑壓の象徴とし、その後の決意の時期に、數百名の最も有能な、そして最も愛國的な青年男女を中國の最後の希望としての赤旗のもとと走らせてしまった（「目覺めへの旅」一二九頁）と述べている。彼は學生たちの助言者でもあつた。

アグネス・スメドレーの「中國の歌ごえ」によると、

北平・天津の學生は何百と群になつて、張學良元帥が新設した學生士官學校に入った。西安における藍衣社の代表は葉道康という名の通っている男の指導で、これらすべての動向を、彼らの親分に報告した。蔣介石總統が張學良元帥に、「なぜあなたの學生士官學校に共產黨員をかくまうのか」と言つて責めると、元帥はそれに答えて、「私のところで學生を判斷するただ一つの尺度は、抗日感情をもっているかどうか、ということだと」と答えた

という（日本譯 一二二頁）。

⑮ 何其芳「延安の回想」（中國現代文學選集十六卷所收）、平凡社刊。なお當時の延安については、スノー「中國の赤い星」ニム・ウェールズ「人民中國の夜明け」などがあり、中國のものでは、陳學昭「延安訪問記」（前記文學選集）、柯藍「延安十年」（前記文學選集）、馬國章「延安永學記」湖北人民出版社、一九六〇などがあり、一九四五年ごろのものとして、趙超構「延安ひと月」京都、中國文化社、黃炎培「延安報告」水谷啓一・小椋廣勝譯、時事通信社、がある。とくに「延安ひと月」は興味深い。延安報告によると、

以前は城内の人口は二千ぐらいであつたのが五萬人となり、そのうち三萬人は公務員とその家族であるという。そこには全く新しい世界があり、活氣に満ちていた。

⑯ 「抗日戦争時期解放區概況」（中國現代史資料叢刊）、人民出版社、一九五三。

⑰ 何長江「回憶紅大、抗大和軍大」光明日報一九五七・九・一五日〜一七日。

⑱ ニム・ウェールズ「人民中國の夜明け」（淺野雄三譯）、新興出版社一九六五。

⑳ 何長工 前掲報告。

㉑ 三上・石川・大芝譯「抗日軍政大學の動向」（關西大學東西學術研究所刊）。抗日大學の教育に關する最も生々しい、詳細な記録で、極めて貴重な資料である。本論文の作製にあたって一番参考になつた。譯者にたいして深く感謝する。

②4 田嘉谷「教育在陝北」。

②5 「抗日軍政大學の動態」書き込み、要約。

②6 草野文男「支那邊區の研究」國民社、昭和十九年。

②7 一九六四年、私は延安革命博物館で實際に見ることができたが、延安革命博物館編「延安革命博物館」、文物出版社、一九五九、に寫眞が出てゐる。

②8 革命的傳家寶、曉白編寫、北京出版社、一九六一年。當時の抗日軍政大學の生活については映畫フィルムがあり、延安訪問のとき見せてもらった。一九六六・七・三一日の人民日報には當時の興味ある寫眞が多數紹介されている。

②9 「抗日軍政大學の動態」書き込み、要約。

③0 延安革命博物館。

③1 「抗日軍政大學の動態」何長工の報告。

③2 延安革命博物館。

③3 毛澤東「青年運動の方向」選集四卷。

③4 何長工 前掲報告。

③5 何長工 前掲報告。

「中共概論」(外務省編、昭和二十四年)でも抗日軍政大學について、

十八集團直轄の學校であつて、總校は延安にあつた外、阜平その他に分校があつた。校長は林彪、政治委員は羅榮桓であつた。毛澤東は「本校は何も黨派の學校ではない。抗日民族統一戦線の學校である。だから非黨員學生の思想・信仰は自由である。ただ抗日でありさえすればよい」とつづつた。少數

精銳主義教育で徹底的に鍛えた學生は今や解放區軍政幹部の中堅的地位をしめてゐる。そうした意味で中共の「黃埔軍官學校」であるともいわれる學校である。

と評價し、またC・ジョンソンの「中國革命の源流」では、統一戦線に關するモスクワ路線を實施した結果、共產黨が得た唯一の具體的利益は、短期間であつたが、都市から比較的多數の學生を補給し得たことであつた。これらの學生は延安の抗日軍政大學を卒業すると大抵下級の政治將校となつて、共產黨で働いた(源流二三頁)

と述べ、また楊成武は中學校を卒業して紅軍に入り、長征のあと抗大の訓練をうけ、晉・冀・察司令の地位を得た。彼の副司令や參謀長はみな抗大の卒業生であつた(源流二一四頁)と彼らの活躍状況をのべ、また新四軍の抗大についても二六六―七に亘つて詳しい説明がある。

③6 人民日報 一九六六年八月一日。

③7 「救亡手冊」についてはすでに現代中國學會の機關誌「現代中國」四四號に發表したが、ここに再び紹介することにした。

なおこのような文獻として、「民衆運動工作講義提綱」「農村青年工作的諸問題」などの翻譯が與亞院華中連絡部で行われ、「情報」四四號、四十號に掲載されていることが、C・ジョンソンの「中國革命の源流」に見える。

③8 日本評論所收 前掲論文。

③9 近代中國の教育史については、齊藤秋男・新島淳良共著「中國現代教育史」國土社刊を参照のこと。

④0 A Documentary History of Chinese Communism, by

Conrad Brandt, Benjamin Schwartz and John K. Fairbank,
London 1952.

本論文の作成に當つて齊藤秋男氏、藤田正典氏（「東洋學報」
四九ノ三）より史料について指示をえた。ここに厚く感謝の意
を表すものである。

また一九六四年、訪中日本學術代表團の一員としてこの延安の
地に訪問の機會を興えて下さった中華人民共和國科學院の方々
に厚く御禮申し上げます（一九七一・八・廿日稿了）。

追記

草野文男氏はその著「支那邊區の研究」の中で抗日軍政大學に
ついて、

諸君が若しあの奥地支那の荒涼たる山野を實現したことがある
ならば、それらの地帯に幾千萬の學生を養成する學院、訓練所
が設けられたことに、一種の驚異と威怖を感ぜられるに違いな
い。

とし、また、

毛澤東をして今日支那のスターリン的地位を確保せしめたる紅
軍大學——現在の抗日軍政大學の價值判斷は決して輕視さるべき
ものではない。この學院を興立つたものこそ支那革命戦線のコ
ミッサルであり、戦闘指揮官であり、勞農運動の第一指導者で
ある

と評價している。